

# 清末中国における性愛規範 ——『男女交合新論』と『婚姻指南』をめぐって——

楊 力

## 問題意識

現在、性愛、婚姻に纏わる観念、およびそれをめぐる一連の語彙は、中国人にとって自明と思われている。だが、その起源をたどってみると、これらの語やそれが示す観念の雛形が出来上がったのは19世紀末であり、比較的新しいものであることがわかる。とりわけ、性、愛、婚姻を一体化する所謂近代的性愛観というものは、19世紀の欧米に由来し、明治日本を経て中国に伝わり、清末時期の中国（1901-1911、以下、清末中国と略記する）社会にあわせる形で定着した。

ところが、西洋から中国へ、性愛規範がどのように伝播してきたかという問題は、これまで研究者の注意を引いてこなかった。また、従来の研究は1920年代前後に焦点を当てる一方、伝統的性愛観から近代的性愛観への転換が起きる清末時期への注目度は低い。清末以降、西洋の男女平等の観念や、一夫一妻制度の移入とともに、性や愛をめぐる認識も変わっており、前近代の中国における性愛規範と合流したが、それらの規範が如何なる形で呈示されたかという問題については研究の余地がある。

以上の状況を踏まえ、本稿では、19世紀欧米の性愛道徳がどのように中国に伝えられてきたのかを検討したい。具体的には、清末中国の通俗性科学書、性指南書（以下「性科学書」とする）<sup>①</sup>を通して、19世紀後半のアメリカを中心とする欧米の性愛規範が中国に伝わる過程と、その過程において科学的知識がどのように利用されたのかを検証する。その際、一次資料として、アメリカの骨相学者ファウラー Orson Squire Fowler（1809-1887）の『男女交合新論』、および性科学者ホリック Frederick Hollick（1818-1900）の『婚姻指南』という二冊の性科学書の中国語訳を取り上げる。これらの訳書と原著の書誌情報は以下の通りである。

- ・美法烏羅著／日本神田彦太郎・王立才編輯／憂亜子訳『男女交合新論』上海：香港書局，1901年。*Creative and Sexual Science, or Manhood, Womanhood, and Their Mutual Interrelations; Love, Its Laws, Power, etc. . . . as Taught by Phrenology and Physiology*, Toronto, Grand Rapids, Mich.: C. R. Parish & Co, 1875.
- ・米国博士荷歴／誘民子訳『婚姻指南』総発行所：啓智書会，発行所：文経活版所，1903年。*The Marriage Guide, or, Natural History of Generation*, New York: American News Co., 1860.

ここでは、キリスト教に基づく性＝婚姻＝愛という三位一体の性愛規範が説かれるが、これまでの研究では踏み込んだ議論の対象になったことはない。これらの二冊を精読したうえで、上海に在住していた知識人・孫宝瑄 (1874-1924) の日記を通して、性科学書に説かれる性愛規範が、当時の中国で生じた「性」の啓蒙と、愛情に基づく一夫一妻制の提唱という時代的要請に順応しながら受容されたことを明らかにしたい。

なお、本研究はこれらの著書の中国語訳にのみ焦点をあてる。もちろん、原文が中国語へとどのように翻訳され、内容がどのように取捨選択されたかはそれ自体重要な問題だが、本稿の射程を超えるため、ここでは扱わない。

## I 先行研究

議論を展開する前に、これまでの研究状況について整理しておこう。近代中国の性愛規範に関する現代の研究は、1910年代後半から1930年代を対象とするものがほとんどである<sup>(2)</sup>。特に1920年代には、恋愛や性道德をめぐる議論が様々な視点から盛んに展開された。中でも、西洋の性科学に依拠しながら中国の伝統的な性道德を批判する論者が多いことが特徴として挙げられる。ただ、“sex”や“love”という語を翻訳した「性」や「愛」といった言葉でさえ、この時期に初めて中国語の文脈に取り入れられたことは、その後の中国に起こる性愛規範の変革や研究の歴史を考える上で重要である。これらの語は欧米から日本を経由して中国にもたらされ、1910年代後半から徐々に広まっていった<sup>(3)</sup>。したがって、1920年代の性愛をめぐる論争は、この時期に突如として始まったものではなく、清末に言葉の翻訳や概念の輸入が始まり、新文化時期(1915-1919)を経て1920年代によく議論の場が形成され始めたと考えられる。

清末中国の性科学書に関する先行研究は、これまで資料の入手が困難だったため、数が少なかった。しかし、その中で重要なものとして、張仲民と唐権の研究<sup>(4)</sup>がある。張仲民は主に出版、広告および受容の観点から清末の生理衛生書について論じた。張の研究は清末中国における初期性科学書研究として注目され、一次資料を広く紹介・整理したことは評価できるが、それらの文献の内容にまで踏み込んだ議論は展開されていない。また、唐権は中国人によって書かれた性科学書『吾妻鏡』(杭州：杭州図書公司、1901年)を、近代の日中関係の観点から論じた。だが、彼の研究は、両国間の文化交流および日本語教育に主眼を置いており、性愛規範の問題は見落とされている。

このほか、西洋の性科学が中国へ伝来した意義に関する研究<sup>(5)</sup>もある。性転換手術や、同性愛に迫ったこれらの議論は注目に値するが、いずれも所謂「性的マイノリティ」に注目したものである。

以上の研究を踏まえ、本論では一国の枠組みにとらわれず、文化の移入という角度から

近代中国における性愛規範について論じたい。具体的には、先に述べた新資料を通して、清末中国の性科学書に現れる西洋の性愛規範を分析したうえで、それが中国既存の文脈とどのような関係を持つのかを検討したい。

## II 清末中国における性科学書の主な特徴

20世紀初頭の中国では、西洋医学に基づく性科学書籍が数多く出回り、一大ブームとなっていた。それらの書籍の多くは海外で刊行された同種の出版物からの翻訳・翻案物で、しかも日本からの輸入書が圧倒的に多かった。この時期に日本で出版された性科学書に関する研究として、明治時期の性科学書を整理し、特徴をまとめた赤川学（1967年生）の『セクシュアリティの歴史社会学』（東京：勁草書房、1999年4月）がある。一方、清末中国における生殖医学・生理衛生書籍を整理した研究は、前掲の張仲民によるものがある。筆者は両研究者の著作を参照したうえ、清末中国における性科学書の大半が、日本から伝えられたことを把握している<sup>6)</sup>。しかしながら、生殖医学や生理学を扱った清末の資料は散逸しているため、張は著作を刊行した2009年当時、わずかに7冊の生殖医学書の原物しか読むことができなかった<sup>7)</sup>。幸いなことに、近年、資料の発掘が進められている。

清末における性科学書の主な内容は、男女の交合から妊娠、出産（育児）までのメカニズムを説明するものとなる。例えば、1903年に上海で出版された新智者編集局編纂『男女衛生新論 一名延寿得子法』の目次は次のようになっている。

### 総論

- |      |                |
|------|----------------|
| 第1章  | 男子生殖器之解剖       |
| 第2章  | 女子生殖器之解剖       |
| 第3章  | 骨盤之解剖          |
| 第4章  | 乳房之解剖          |
| 第5章  | 男子生殖器之生理及春機発動期 |
| 第6章  | 女子生殖器之生理       |
| 第7章  | 婚姻之注意          |
| 第8章  | 将結婚者須先知之事項     |
| 第9章  | 精液之泄出          |
| 第10章 | 於交接時女体之变化      |
| 第11章 | 背理之淫事          |
| 第12章 | 交接過度之害附過淫之法    |
| 第13章 | 生活状況与生殖力之關係    |
| 第14章 | 全身病与生殖力之關係     |

第 15 章	男子生殖器之異常及疾患
第 16 章	女子生殖器之機能障害
第 17 章	花柳病
第 18 章	宜設公娼論及花柳病予防法
第 19 章	卵之妊孕
第 20 章	妊娠時於母体变化即妊娠徴候
第 21 章	胎児之發育
第 22 章	異常妊娠
第 23 章	妊娠中摂生法
第 24 章	妊娠之秘訣
第 25 章	論避妊及墮胎

目次からわかるように、同書は男女の身体の解剖、交合、生殖、性病、妊娠などについて、かなり詳細に扱っている。そして、清末における性科学書の出版意図は、それぞれの書物の扉頁に書かれており、「強国保種」「進種改良」という目標と絡めて説明されている。例えば、1901 年に出版された『男女交合新論』の「序」扉頁には、以下のようにある。

本書は最初に精神の愛を説き、中に交合の要を論じ、終に妊娠の源を示した。(本書を) 閲覧される諸君、収穫はありましたか。そのほか、進種改良の道にも益があればよいと思います。<sup>(8)</sup>

性科学書に対する読者の反応は多様だったが、主に「進歩書」として評価する声と、「淫書」として批判する声の二つに大別できる。李伯元 (1867-1906) は『文明小史』で『男女交合大改良』『伝種新問題』の二冊はいずれも三千部も印刷され、(中略) 一ヶ月もたたないうちに大半が売れた<sup>(9)</sup> とし、書物の作り手と受け手である読者の双方が性科学書に熱狂したことを指摘する。さらに、これらの一連の性科学書籍は、さまざまな人々の日記や随筆、文学作品にも登場するので、読者個人の内にとどめ置かれることなく、広く読まれたことがわかる。

例えば、冒頭で触れた上海居住の孫宝瑄の『忘山廬日記』には、1901 年 7 月 3 日の条に『男女交合新論』を購入したという記述がある。「昨日雅叙園 (上海にある庭園) で黄益齋 (という人) に会ったところ、(彼は)『男女交合新論』という新しい訳書を所持していた。米国人のファウラーの著作だそうである。販売所を聞いたら、第一樓後理文軒 (という場所) にあるそう。同日そこにゆき、一冊購入した。」<sup>(10)</sup> これらの記録から、彼が性科学書籍を購入し、それに書かれた新知識に関心を寄せていたことがうかがえる。そしてその背後には、「中国の種族問題に対する憂慮および人種改良への関心」<sup>(11)</sup> があったと考えられる。

また、湖南の郷紳葉德輝（1864-1927）も『男女交合新論』に言及している。1903年に彼が書いた「新刊素女経の序」には、

今遠西の衛生学を言う者は、皆飲食男女の故<sup>こと</sup>において、隱微を推究し、新書を訳出す。『(男女) 生殖器 (学)』、『男女交合新論』、『(男女) 婚姻衛生学』の如き、無知の夫は、<sup>おど</sup>詫ろきて鴻宝と為す。殊に知らず、中国の聖帝神君の<sup>ちゅう</sup>胃（子孫）は、この学を已に四千年以前において講求せるを。<sup>(12)</sup>

と述べられている。ここから、清末中国の知識人は、一連の性科学書の出版に対して、様々な眼差しを向けていたことがわかる。

前述のように、『男女交合新論』は1930年代まで刊行されつづけた。1920年代には、魯迅（1881-1936）も同書について言及している。彼は、1892年に刊行された俞葆真編『百孝図（説）』が、1920年に上海の書店で『男女百孝図全伝』と改題して再発行されたことに對して、「朝花夕捨」の「後記」で次のように述べている。

人心ということになると、たしかに輕薄になつてきているようだ。『男女の秘密』、『男女交合新論』が出現して以来、上海では書名の頭に『男女』の二字をつけるのが流行になった。今では「人心を正して風俗を改良しようとする」『百孝図』にまでそれが及んだわけだ。<sup>(13)</sup>

「書名の頭に『男女』の二字をつけるのが流行になった」とあるのは、人々の耳目を引き付けるため、出版業者が各種の書物に「男女」の二文字をつけたことを指す。上の引用を見ると、出版業者らの思惑に対し、魯迅は好感を持っていないようである。これらの書物が人気を博した背景には、より多くの読者が、性科学書を「淫書」と看做した一方で、性的なるものへの抑えきれない好奇心が購読の動機となっていた事実があると考えられる。

魯迅以外にも、性科学書の流行に眉をひそめる知識人は多数いた。『男女衛生新論』の「総論」「序」にも、これまでに流通している『交合論』や『生殖器論』などは「淫乱に導いていく媒介」でないものは稀だとある。さらに、標題で「男女」をうたう書物には「人心を害するものが概して少なくない」、その中には衛生や哲理を語るものがあるとの弁護は「淫盜に導く」語りだと酷評する者もいた<sup>(14)</sup>。

これに対して、『男女交合新論』を取り上げて「世間は往々にしてそれを淫書と看做すが、それは大間違いだ」と説く徐維則（1867-1919）や、「本書は猥褻な意味は少しもなく」、「淫書と見てはいけな<sup>こしょうこう</sup>い」<sup>(15)</sup>などと語る顧燮光（1875-1949）のように、性科学書を啓蒙書と看做す知識人たちもいた。けれども、性科学書を淫書と区別しようとする論者のそうした指摘からは逆に、清末中国の言論空間において、性科学書を「淫書」と同一視する風潮がど

れほど濃厚であったのかを見て取ることができる。

### Ⅲ 欧米に由来するもの——『男女交合新論』と『婚姻指南』

先に述べたとおり、清末中国で出版された性科学書は、日本人の著書を翻訳したものが圧倒的に多かった。だが、その一部は欧米の書籍からの重訳である。本論では、19世紀後半にアメリカで出版され、その日本語版を中国語に翻訳した『男女交合新論』および『婚姻指南』を通して、これらの書物に反映される性愛規範と、その性愛規範と性科学との関係について検討する。

#### 1. 『男女交合新論』

憂亜子訳『男女交合新論』は、現在確認される中国の性科学書の中で最も早く出版され、かつ広範囲に読まれていた性科学書の一つである。

同書は明治 11 (1879) 年に橋爪貫一 (1820-84)<sup>(16)</sup> が発烏羅著『男女之義務』(東京: 玉山堂, 明治 12 年 3 月) として日本語に翻訳したもので、原典については、その「叙」に「西曆一千八百七十五年米國骨相學大博士ファウラー氏の著述するクリエチフ, エンド, セキシユアル, サイエンス, の内より生殖篇を抄訳する者」とある。明治 21 (1888) 年に東京書林春陽堂から再版される際に『男女交合新論』と改題され、その後続々と版を重ねていった<sup>(17)</sup>。本書が中国に伝わったのは 1901 年であり、美法烏羅・日本神田彦太郎著『戒淫養生男女種子交合新論』, 美法烏羅著／日本神田彦太郎・王立才編輯／憂亜子訳『男女交合新論』, 美法烏羅・日本神田彦太郎著『男女交合秘要新論』と様々な題名で出版され、1930 年代以降も重版されるなど、他に類を見ないほど長期にわたって読まれていた<sup>(18)</sup>。

原書の著者ファウラーはアメリカ人で、著名な骨相学者でもある<sup>(19)</sup>。『男女交合新論』は原著中の Generation (生殖) 篇を抄訳したものと推測される。同書は、ファウラーの著述活動の後期に書かれたもので、1000 頁以上にわたる大著である。執筆の意図について、ファウラーは同書の「序言」Preface で、ジェンダー、男性、女性、愛、婚姻、生殖と、それらの間における家族的、性的関係を提示することにあると述べ、また同書は男女における相性や、愛というものを「科学的」に説明する書物であることを繰り返し強調している。加えて、執筆に当たっては、本書は専門的な用語をなるべく抑え、一般大衆にわかりやすいよう心がけたとも説明している。

#### 2. 『婚姻指南』

誘民子訳『婚姻指南』の原書 *The Marriage Guide, or, Natural History of Generation* は、19 世紀のアメリカでかなりの人気を博し、20 年の間に 300 刷を重ねたという<sup>(20)</sup>。ホリックの著書は 8 冊ほど日本語に訳されているが、同書の邦訳は、次の二種類が確認され

ている。

『生殖自然史 一名婚姻之果』隠岐敬治郎・大西直三郎訳、島村利助、1896年7月。

『生殖器新書 一名既婚未婚男女必讀婚姻案内』守矢親国訳、博文館、1897年11月。

両者は翻訳用語などに違いが見られる。これらを、中国語訳『婚姻指南』とつき合わせて読んでみると、『婚姻指南』は隠岐・大西訳よりも守矢訳と類似する点が多く確認されたため、中国語への翻訳には守矢訳が用いられたと考えられる。

また、1901年に上海で出版された霍立克著／仇光裕口譯・王建善筆述『生殖器新書』（日新書所）も、同じく守矢訳からの重訳と推測される。そのほか、ホリックの著書『男生殖器の研究』（伊沢徳訳、求光閣書店、1906年10月）も、中国語への翻訳版（1909年）があり、その冒頭には、「美国医学博士花立克原著、訳述者日本医士伊沢徳、復訳者雲間姚昶緒」と書かれている。

このほかに、ホリック著とされる『男女之秘密』があるが、この原書はそもそも存在せず、贋作であると考えられる。同書には日本版と中国版の両方が存在し、調査の結果、中国では少なくとも1936年まで出版され続けたことがわかった<sup>(21)</sup>。

贋作が出版された背景として、ホリックが日本と中国で一定の知名度を持っていたことが考えられる。日本では、井上次郎（よしはる 巖本善治。1863-1942）が明治18年『女学新誌』に「夫婦の愛」と題して、ホリックと思われる「米国の学士クツク氏」の説を紹介した<sup>(22)</sup>。また、中国では、1928-1942年までの間、上海『申報』の広告欄に、男性病、とりわけ腎臓の病気を治すためにホリックが発明したとされる医療機器の宣伝広告が掲載されている<sup>(23)</sup>。贋作の出版社は、こうしたホリックの人気に乗じて、一儲けしようと目論んだのではないだろうか。

#### IV 『男女交合新論』『婚姻指南』とアメリカ

##### 1. 19世紀アメリカにおける性愛規範

すでにふれたように、『男女交合新論』と『婚姻指南』の原書は、いずれも19世紀後半にアメリカで出版されたものである。上野千鶴子（1948年生）は明治時期の性科学書を分析する際に、『男女交合新論』（邦訳『男女之義務』）は「性＝愛＝結婚」が「三位一体の近代ロマンチック・ラブ・イデオロギー」について集中的に論じていると指摘し、「性と愛の一致にもとづく結婚という近代性道德の直輸入のかたち都在这里に表われている」<sup>(24)</sup>と論じた。

上野は社会学的観点から、西洋の「近代的性愛観」を自明の概念として扱うが、中国の研究者や一般読者にとって、西洋の「近代的性愛観」とは馴染みのない概念であり、その定義や中国に移入される過程については、明晰に考察されていないのが現状である。

19 世紀アメリカの性愛規範について、橋爪大三郎 (1948 年生) は以下のようにまとめている。

- ① 配偶者となるべき両者のあいだには、あらかじめ、愛情——双方を人称的に結びつける、必然的な内面のつながりが成立していなければならない。
- ② 次にその愛情が、婚姻として実現され、市民社会の道德律による是認と聖別をうける。
- ③ 婚姻は、愛情が実現する最高の形態であり、それは肉体的な結合を含意する。——こうして人は、愛するがゆえに夫婦となるのである。もしも愛していないのであれば、あるいは愛が欠如してしまったのであれば、夫婦であるという選択は誤っていることになる。<sup>(25)</sup>

次項では、橋爪が指摘した性愛規範が具体的に何を意味するのか、またそれはどのような清末の性科学書に反映されているのかという問題について検討したい。

## 2. 『男女交合新論』と『婚姻指南』に現れる性愛規範

19 世紀のアメリカの性愛規範については、Steven Seidman, *Romantic Longings: Love in America, 1830-1980* (New York and London: Routledge, 1991) <sup>(26)</sup> が詳しい。同書では、1830-90 年代をヴィクトリア朝時代として、この時期に出版された通俗医学書や結婚案内書に依拠しながら、そこに表象される性愛に付与されるイメージを探究した。その中で、ファウラーとホリックの著書もヴィクトリア朝時代の性愛規範を表すものとして取り上げられている。以下、中国語に訳されたファウラーとホリックの著作に見られる性愛の議論について、分析していきたい。

### (1) 交合の合理性を認め、節制を強調

まず、両書における性的欲望の扱い方から見ていこう。いずれの書物も、交合の合理性を認めたうえ、性的欲望の節制を強調していたことが読み取れる。その主張は、男女間の交合の正当性を認め、肉体的欲望の存在は必要かつ重要であるということである。この点について、『男女交合新論』では、次のように書かれている。

動物の生命は宇宙において最も貴重なものである。男女が交合して児を儲けることを軽視してはならない。そもそも配偶の契約は最も慎重になすべき事項であり、破るべからざるものである。(中略) 愛情の増進するに従い交合の念も増進する。故に婚姻後に交合の念は高度に至る。交合は女子において児を儲けるために最も尊重すべき事業である、それを猥褻の業だとして見なくてはならず、食欲の下に置くべきものではない。生命



は汚れたものではなく、実に人間の生殖器は神聖中の神聖なるものである。<sup>(27)</sup>

また、『婚姻指南』の訳者は、本書を訳した意図について次のように説明した。

婚姻の目的はすべて交合にあるのではないが、交合がなければ婚姻の目的を達成することはできない。交合が神聖なる事業であることは言うまでもない。文明の世界は物事を知るが、その原理を知らなければ君子として恥すべきである。生殖器は体内の最も重要な器官となり、人類が出現して以来、代々生殖の功を営んできた。とはいえ、最近まで（人類は）その原理を知らなかった。その理についての研究は19世紀半ばより明かりが灯りはじめ、ホリックの本はその理を世間一般に普及させるのに最も適切なものであるため、このたびそれを訳出したのである。<sup>(28)</sup>

そして、これらの書物は性欲の存在を認める一方で、過度の交合、もしくは性的欲望を過度に発散することを戒めるよう力説した。この点について『婚姻指南』では、交合過度は、人体の栄養を損ない、身体を弱めるだけでなく、神経の力を大いに費やし、その衰弱を来すなど、諸々の官能に害を及ぼすと説かれている<sup>(29)</sup>。

## (2) 交合に規範を設ける

両書のいずれも、過剰な性を批判し、性欲の節制を提唱したことに加え、性を道徳的・社会的な目的と結びつけ、様々な規範を設けるよう説く。以下、具体的な規範について考察する。

**第一に、性は結婚にのみ正当性があり、必ず生殖と結び付けられる。**

『男女交合新論』および『婚姻指南』はともに、具体的な規範として結婚制度に言及する。いずれも性の正当性を結婚という形態にのみ認め、その意義を生殖と結びつけて説明する。ここでは主に『男女交合新論』を取り上げて、結婚制度と結びつけられた性のあり方について見ていこう。

『男女交合新論』には、「交合はただ婚姻後に行うべきであり、そうでないと充分の快楽を得ることはできない」としたうえで、「男女が結婚するのは即ち交合のためである。故に良人に同寝を許さないのは妻の過ちである。人妻が良人に常に不満を抱かせることは、一家の親睦を破る行為となる」<sup>(30)</sup> などとあり、性は婚姻関係にある男女の間にしか認められていない。

この点について、『婚姻指南』では、「人類は結婚の時期となると、真の淫情はまだ起きていないが、それでも常に特別の徳義や智能の需要のもとで、相互に愛し慕い合うことが生じる。ついに肉欲が呼び起こされ、情に呼応することになる」<sup>(31)</sup>、そして前出のように

「婚姻の目的はすべて交合にあるのではないが、交合がなければ婚姻の目的を達成することはできない。交合が神聖なる事業であることは言うまでもない」<sup>(32)</sup>とあり、やはり婚姻内部における性の重要性が強調されている。

これに対して、婚姻外部の性は排除され、姦通や妾はきびしく批判される。『男女交合新論』は姦通について、「甲に愛情があるのに乙と交合することは姦通となる。雑乱の交合は必ず淫欲を増し男女の性を悪くする。今夜はこの女を擁し明日は別の女を擁すると愛情を害する」とその害悪を説く。また、夫が妾を置くことについては、「妾を以って枕席の楽に供するのは姦通に比べるとその害はやや少ない」が、「妾を愛する時は必ず本妻との和合を欠き、淫欲を増す一方であり真の快樂を失う。昨今妾を持つ家は大抵禍を醸して不幸を招く結末となる」<sup>(33)</sup>などと述べられており、性は婚姻の内部に囲い込まれる。

ここで注目されるのは夫婦愛であり、夫婦和合の秘訣は交合にあると説かれる点である。『男女交合新論』には、「夫婦の睦まじさはすべて交合によるものとなり、夫婦仲が悪い原因は必ず交合が調和を取れないことにあり、交合は調和が取れればいくら相手を嫌ってもいずれ和解する。人の妻妾としてたとえ一つも技芸能力がなくても、交合において充分に快樂を交換する者は完全なる妻妾である」<sup>(34)</sup>と指摘され、夫婦仲の中核は交合に置かれている。

けれども、交合は夫婦間の情の問題としてのみ重要視されているわけではない。同書において、交合は必ず生殖と結びつけられ、生殖の手段としての性のあり方が称揚され、それに伴う快樂も認められている。特に、生殖の手段としての性に関しては、個体の再生産という目的を理由に、婚姻関係の中で義務化され、性行為に伴う快樂は必要かつ重要だと考えられていた。

上のような議論において、生殖は「男」と「女」を定義づける最も肝心な要素だと思われる。『男女交合新論』では、「男女の交合は児女の成長、性質や様相の根源であるため、人生の大事ではないか。ゆえに交合の道を得るときは男女に関するすべては正を得る、失うときはすべては正を失う」<sup>(35)</sup>と交合の第一義を生殖に置く。そのうえで、「完全な男子と称するものは交合の要務において男子の本分を尽くすことにあり、ゆえに子を作ることができる男子は完全なる男子であり、作れない男子は男子とは言えない。完全な女子と称するものは交合の要務を尽くすことにあり、子を生めない女子は女子とは言えない」<sup>(36)</sup>などと記されており、男女の役割が生殖能力と不可分の関係として定義されている。従って、同書では、生殖の手段としての交合の重要性のみが強調され、性行為における快樂もよりよい子供を作るための必須条件とされていたと考えられる。また、同書には、「少壮の男女で生殖器の功用を知らず、夫婦の義務や父母たる道理を知らずして軽率に性交する者は畜生にも及ばない」<sup>(37)</sup>と主張されている。

このほかにも、「男子の生殖器は交合のために存在し、それは頭が知覚のためにあり、筋肉が運動のために存在するのと同様である。使い道を知れば天に従うことになるが、知ら

なければ天に逆らうこととなる」<sup>(38)</sup>などと説かれており、交合は生殖の手段であることが強調される。また、「男女同時に快楽に達するのは子供を作るのに必要である。ある婦人に長らく子がなかったのは、夫婦が性交時に快楽を感じなかったからだ。ある日の夕方、突然春情が訪れ、夫妻ともに佳境に入り、ついに子を授かった」<sup>(39)</sup>とか、「交合時に男子が射精するのが早すぎると無子の原因となり、胎児が欲しいなら女子の生殖器に快楽を感じさせなければならない。男子は射精が早すぎると女子が快楽を覚えない原因となる」<sup>(40)</sup>とかいう文章は、交合時における快楽や快美が重要視されていたことを示している。

## 第二に、愛は性の必須条件となり、両者は一致すべきである。

先に触れたように、『男女交合新論』と『婚姻指南』のいずれの書中でも、婚姻は単に生殖のために存在するのではなく、愛情もまた必須要素であるということが繰り返し唱えられている。

『婚姻指南』では、「人類の交合の作用（劣等な蛮夷とは違う）は、ただの官能の刺激によるものではなく、互いに愛し合い、知恵によるものがほとんどである」<sup>(41)</sup>、「人類の愛恋の心はただ男女の欲に由来するのではなく、その情は実に複雑である。（中略）（人類は）畜生のようにただの肉交以外なにも知らないようなものではない」<sup>(42)</sup>と言及され、“欲”と“情”を区別している。なお、ここで言われる“欲”とは性欲による性交であり、“情”とは愛情による性交であることにも注意しておきたい。

『男女交合新論』は、情のある性欲を「情欲」、情のない欲望、すなわち性交のみを目的とする欲望は「淫欲」と、明確に区分して次のように論じている。「精神の愛は淫欲を含まない、淫欲は精神の愛を含まない。（中略）精神の愛が減ると淫欲は増す。相手の肉体ばかり愛する者は愛情ではなく淫欲に由来する者である。男女が常に精神の愛を育んでいくと、淫欲は生じない」<sup>(43)</sup>。

そして、愛と性<sup>(44)</sup>の原理について、愛情は性に先立って存在し、性は愛情の伝達手段でもあると論じた。具体的な言及として、

愛情と生殖器とは相互に感応する。ゆえに生命を伝延することができる。（中略）愛情なしには陰具は勃起しないし、陰具は勃起しなければ交合はできない。すると愛情は無用なものとなる。両者の相感応することが生命の創造に欠かせないのである。その原理は次のようになる。第一、愛情は生命の創造を司り、生殖器を奨励する。第二、愛情が起きれば生殖器も感動し、生殖器が働けば愛情は必ずこれに応ずる。<sup>(45)</sup>

設生の大用（子を儲けること）は愛情と生殖器との協力により成るものであり、愛情と生殖器の中には必ず他に先立って誘導を為すものがあり、愛情はつねに生殖器の作用に先立ってそれを喚起する。<sup>(46)</sup>

愛情は精神を伝える資、交合は身体を作る業である。故に二者相合しなければ決して延嗣（子を授かること）の用を為すことはできない。<sup>(47)</sup>

などが見られる。

以上のように、愛情は生殖に必須でかつ重要な要素である。「人生の幸福は父母の交合により定まる。父母が交合に快楽を感じる場合はその子も身体強健で俊秀になる。人間が俊秀な子を求めるなら、交合には極上の快楽を感じなければならない。精神の愛がなければ造化の妙を得ることはできない」<sup>(48)</sup>と書かれるように、愛情は子の健康に関わることを考えられていた。

それを実証するための根拠とされたのが遺伝学の知識で、『男女交合新論』には、次の二例が挙げられている。

- ① ある健康で聡明な若い女が（ある日）アイルランド兵を父親とする私生児を分娩した。しかし、その男児は「白痴の様子を呈する」ので、その原因を尋ねたところ、彼は「酔狂後の交際によるものであ」るため、「野合」の結果、この「豚児」を生むことになったと答えた。<sup>(49)</sup>
- ② かつて一男子は性質が頗る多淫であり、その妻は淫情が甚だ淡泊で、交合の苦を恐れていた。そのため、妻は夫に誓って曰く、妾を入れれば苦勞しない、もしくは色街を訪れても責めない。ちょうどそのころ、隣家にあるイタリア生まれの下女がおり、肌色はやや黒くて顔はかわいらしい。男は彼女に恋着し、百方誘惑したが、彼女はその意に従わず、却って恋情は益々激しくなる。ある日男は春情を抑制しても耐えられなくなり、妻に交合を強いた。しばらくして妻は妊娠して顔が黒婦によく似た女の子を産んだ。それは（交合の際に）男子の情欲が黒婦にあったためである。<sup>(50)</sup>

これらの例から、『男女交合新論』と『婚姻指南』に反映されているのは、結婚中心の生殖を強調した性規範であることがうかがえる。そこでは、結婚においてのみ性の正当性が求められ、性は生殖という目的と結びつくことにより、社会的、民族的に有益な行為と看做されるようになる。けれども、両書は結婚が単に性（生殖）のためだけのものではなく、結婚の必須条件は愛であり、結婚において、性と愛は一致すべきであるという立場をとる。

## V 清末の中国社会における性愛規範の受容——孫宝瑄『忘山廬日記』を通して

これらの性科学書が説いた知識は、当時の人々にどのような影響を与えたのだろうか。

前述したように、性科学書には清末中国の言論空間で様々な眼差しが向けられていた。その内容に対して賛否両論が渦巻く中、一部の知識人は中国の現状を憂慮し、性科学書に中国社会の「伝種改良」の方法を探りだそうと期待しながら閱讀したと考えられる。本節では、孫宝瑄『忘山廬日記』を取り上げ、性科学書に宣伝される性科学知識、および性愛規範が中国社会にどのように受容されていたのかを検討したい。

## 1. 生殖の手段としての性の重要性

清末中国では、性に関する意識改革が起こっていた。「強国保種」という強い要請のもと、いかにしてよりよい国民を創造できるかが注目をあつめたのである。その中で、生殖の重要性が浮き彫りにされ、性的欲望や性本能に関する叙述が「生殖」の手段として重視され、生理衛生の科学的知識に導かれながら、性は公的な議論の対象となった。

当時出版された性科学書には、性の合理性を認める内容が多々綴られている。この類の書物では、性的行為は部分的に正当化され、性本能が正しく行使されれば、人類の健康や再生産に有益であると考えられていた。

例えば、『男女衛生新論』は、「世の中の人々は生殖器なる語を以って誨淫となし、男女交合を以って猥褻となし、僧侶はそれを以って五戒の一とし、世俗は是を以って諸悪の首となし」ているが、人々が生殖器の衛生に注意しないと「国は滅び」「人類は跡を絶つ」恐れがあると警告する<sup>(51)</sup>。また「生殖器衛生学は、小にしては夫婦の愛情、一家の和楽に関し、大にしては、即ち国運の盛衰、社会の進歩発達に関わる。生殖器と言ひ、男女交接と言うも、光明正大にして、一点の不可なる所なし、何の淫猥か」<sup>(52)</sup>と指摘されている。

また、森田峻太郎『伝種改良問答』（上海：商務印書館、1901年）には「男女の情欲は天性のため」とあり、「父母となる者は（男女の理を）研究することによって必ずよい子孫に恵まれる」<sup>(53)</sup>と書かれており、性は子孫の繁栄に直結するため、人々がその価値を大いに認識する必要があると説かれている。

これらの書物の著者が説いた通り、当時の中国では、性の重要性が生殖と緊密に結びつけられながら認められていた。それとともに、性科学の知識も一種の新知識として受け入れられた。前文でも触れたが、清末に出版された性科学書の愛読者の一人に孫宝瑄がいる。彼の『忘山廬日記』には、購読した性科学書について数多くの言及が残されている。

例えば、ファウラー『男女交合新論』を購入したという1901年7月3日の条の後、旧暦五月二十二日（1901年7月7日）の条には、次のように記録されている。

タベは『男女交合新論』を読んだ。米国人ファウラー著。子作りを論ず、極めて奇なり。曰く、交合で胎児をもうける際、その父母が偶然に善良ではない念を持つと、凶悪な子が生まれる。酔狂後交合する者は、生まれる子女も酒狂である。従って、聡明であり善良なる子女が欲しい場合、その父母の脳や心術が、人並み優れていなければ

ならない、これはすでに試練を経た方法だ。<sup>(54)</sup>

また、一年半後の癸卯年正月二日（1903年1月2日）の条にも、同じような遺伝の知識が記録されている。

『交合新論』に謂わく、交合において、善良なる父でも、一念が不純となると、悪子が生まれる。凶悪な父でも、一念が純良となると、善子が生まれる。<sup>(55)</sup>

これらの記述からは、『男女交合新論』から受けた性交と遺伝の関係に関する知識が、孫にどれほど強い印象を残したのかを読み取ることができよう。

孫は、『男女交合新論』のほかにも、数多くの性科学書を購入し、その中にはホリックの著書も含まれていた。前掲日記1901年8月26日の条には、「東文（日文）書数種を購入する。すなわち『普通妊娠法』渡辺光次著、『男女造化新論』武藤忠夫著、『生植器』米国仏栗智国著」<sup>(56)</sup>と書かれている。

また、1902年12月30日には、『伝種改良問答』を閲覧後の心得についても記述が見られる。

一日、晴れ。『伝種改良問答』を閲覧した。日本人森田峻太郎著。女子に月経がある原因は、泡卵に足がでる時、泡卵の内部にかならず刺激をうけるうえ、子宮に血がたまり、内外ともに腫れる。腫れが一定の程度になると、毛細血管が破裂し、月経が流れることによる。これはかつて未聞だったので、メモしておく。又曰く、男女の生殖器は、その形状は異なるものの、構造はほぼ同一である。男陰を裏側に返すと、女陰の形になり、女陰部を外側に返すと、男陰部の形になる。<sup>(57)</sup>

以上から読み取れるように、生殖の手段と見られる性そのものをめぐる科学知識を、孫宝瑄は積極的に吸収しようとしていたのである。

## 2. 自由恋愛に基づく一夫一妻制度の唱導

『男女交合新論』と『婚姻指南』がともに愛のない婚姻を批判し、生殖のほかに愛情もその必須要素であると強調したことは、すでに検討した。実のところ、19世紀末、西洋の自由恋愛に基づく一夫一妻制度が中国に伝わると、西洋を手本にしながら、既存の一夫多妻制度や、親の取り決めに従って結婚するという慣習を批判する声があがった。性科学書の流通は、それらが宣伝する性愛規範が、既存の婚姻制度を批判する当時の中国の潮流に合っただけでなく、それらの言説に生物学基礎を提供する形で、相互の主張を補強する一助となったと考えられる。

まず、当時の新聞や雑誌には、結婚制度についてどのような言説があるか見てみよう。1898年8月27日の『女学報』第5期に掲載された評論「貴族聯姻」では、中国と西洋を対比させる形で、次のように西洋の婚姻制度を紹介した。

中国では婚姻は最も慎重に行われてきた。必ず媒酌を通して父母の命に従う。礼教は謹厳だが、それにより生じる弊害も大きい。鳳凰と鴨を無理に結ばせると、怨恨は一生残り、夫婦は結局仇となる。西国ではそうでない。男女21歳になると、すべては自主的に決められるし、父母の権利も行使できない。配偶の選択には、媒酌がいらず、二人は情さえ合えば、心が同じように結ばれる。<sup>(58)</sup>

また、1901年4月19日の『清議報』第76冊には「婚姻自由論」という文章が寄せられ、次のように書かれている。

このところ、欧米諸国を観察すると、男女は自由に相手を選び、陰陽は調和がとれ、誰も怨恨を感じず、社会はますます発展して繁栄する。例えば教会で牧師の立会いで成婚する。一夫一婦を以て妾を禁止し、妻を捨てることはできないうえ、姦通もない。そうすると天地に怨恨を持たなければ、父母は遺憾も感じない。<sup>(59)</sup>

このほか、1904年『女子世界』第9期に掲載された「婚姻自由の関係を論じる」という文章では、筆者が西洋の婚姻相手の選択法について紹介したうえで、次のように述べて中国の現状を嘆いた。

我々中国の若い男女には、これまで婚姻の自主権はなかった。実のところ、婚姻は男女にとって最も切実で重要なことである。父母はこれに関係せず媒酌にも関わるべきではない。西洋各国の女子の結婚相手は、必ず平素親密な友人、もしくは学校の同級生、あるいは公園やパーティーで出会った人であり、常に話し合うことを通して、学問の程度や趣味の状況がよくわかる。そのうえで永遠に結ばれることを決めると、互いに配偶者になる。それは中国人がよく夢想することではないか。ああ、西洋の若者は人間であることは言うまでもないが、我々中国の若者も一人の人間である。どうして生まれながらに人に操られるのだろうか。<sup>(60)</sup>

新聞だけではなく、本論で主に取り上げた『男女交合新論』と『婚姻指南』という二冊の性科学書以外の書物も、全般に自由恋愛に基づく一夫一妻制度の提唱に多くの紙幅を割いている。それらは、一夫一妻制が自然の法則に従うものであると説いており、このことが近代中国の婚姻制度の改革をある側面から推し進めたと考えられる。以下に、それらの

科学書の主張を紹介しよう。

例えば、日本藤根常吉著／無錫丁福同訳『婚姻進化新論』（上海：文明書局，1903 年）は、多妻から一妻へという制度の変容が「野蛮」から「開化」への進化だと主張した。

人間において婚姻制度は多種多様であり、一男一女の婚姻，所謂一夫一妻，一男数女の婚姻，所謂多妻，数男一女の婚姻，所謂多夫などがある。またそれらと異なる数男数女の婚姻もある。社会学者と人類学者は，万古男女は雑婚であり，所謂乱淫だったが，徐々に多妻，それから多夫になってきて，最終的に一夫一妻に進化することを明らかにした。（中略）要するに一夫一妻はごく一般的な婚姻制度であり，人類の多数は太古の制度に従い，多妻の制度は数多く存在していたが，それでも次第に一夫一妻制になる傾向がある。（中略）一夫一妻制度は自然の法則となる。（中略）男子が一妻に満足しないのは天理に背く。<sup>(61)</sup>

また、『男女衛生新論』は次のように説く。

夫婦相愛の程度は妊娠に大いに関わる。結婚しようとする際，二人が意気投合するか否か，容貌体格はあうか否か，学術資産は備わっているかどうか，とりわけ二人の間に愛情が完璧なのかどうかを確認することは最も肝心な要素である。中国の結婚の法は，ただ親の意志にのみ左右され，親は往々にして利に駆られる。子女当人の意志は全く問われない。<sup>(62)</sup>

西洋諸国では自由結婚が盛んに行われる。自由結婚とは男女が自主的に配偶者を選び契約を結ぶことに決め，日を選び結婚式を挙げることである。父母はそれに干渉するべきではなく，親戚も関わってはならない。ただ二人は愛情のみにより結ばれるのである。<sup>(63)</sup>

さらに，日本女医師松本安子著／誘民子訳『男女婚姻衛生学 一名少年男女須知』（上海：啓智書会，1901 年）では，

婚姻の起源は種族の保全にあると言われるが，初期にはそれがおろそかにされており，そして人類の進歩に従い益々重要になりつつある。各人は生存において，男女の特長を相互に補い合うことが大切である。婚姻の制度は世の中に種々あるが，一夫一妻は最も自然で正しい形である。<sup>(64)</sup>

とし，また「婚姻には四種類ある。感情および体格ともに適合する婚姻が理想的である」<sup>(65)</sup>などと説かれている。



ここで、これらの性科学書の伝える知識を孫宝瑄の日記に重ねて考えてみよう。彼は、性科学書に書かれる恋愛結婚についてどのような認識を示したのだろうか。1902年12月30日の日記は、森田峻太郎『伝種改良問答』の読後感を次のように綴る。

世界文明の極みは、男女が自ら配偶者を選ぶことにある。それが学問を媒介にしながら、学問を境界にする。なぜそうするのだろうか。それは男女を問わず、学問があれば、学問のない人とは突然相愛するはずがないからだ。<sup>(66)</sup>

また、1902年11月29日の日記に、『吾妻鏡』と東都愛情散史校閲・浪華艶情笑史著『男女交合無上之快樂』（大阪：梶尾商会、1898年）という二冊の性科学書についてこう記す。

夜、観劇して、嫌気がさしたので、散歩がてら第一楼（前出の第一楼後理文軒と同じ場所と思われる）にてお茶を楽しんだ。本を二種入手した。『吾妻鏡』と、『男女交合無上之快樂』だ。『吾妻鏡』、通州楊凌霄著。凌霄は私の旧知だ。彼の人生に三楽との説は、私の考えにもぴったりだ。また、彼曰く、欧州古来の大人物の大半は野合により生まれた者であった。野合は、必ず相互に意気投合するため、種の性質が精良であり、それにより作られる人間も往々にして非凡である。我が国は男女が自由に配偶者を選ぶのを禁じ、それによる交合は無理なものがほとんどである。そのため、種の性質は不精良であり、優れた人材も珍しい。国が振興しないのも、それが一因と言えよう。『男女交合無上之快樂』、日本人著、『交合新論』とほぼ同様である。その中では、男子の精虫は、山の中の金銀のように、女子の精卵は、海の底の玉のように、いずれも宝物であるという説はとても印象深かった。<sup>(67)</sup>

孫にとって、中国の結婚制度の欠点は「男女が自由に配偶者を選ぶのを禁じ」られていることであった。当時の中国では、結婚は愛情ではなく家同士の合意に基づくものであり、あらたに夫婦となる男女の意見や感情は顧みられなかったのである。その結果、「交合」は愛情の伴わない「無理なもの」となり、生まれてくる子供の「性質は不精良」、国民の中の「優れた人材も珍しい」と考えたのである。

では、具体的に結婚するに至るまでの過程を、孫はどのように考えたのだろうか。1902年12月31日の日記には、次のような記述が見られる。

二日、『伝種改良』を読み終わった。夜は『胎内教育』を読む、日本伊東琴次郎著。忘山居士（孫自身を指す）曰く、夫婦の配合は、自分で選択するのが宜しい、それは欧風である。ただ、それが野合とはどのような違いがあるのか。それは、夫婦として結ばれる前に友達になる。すると二、三年経って、互いに性格や気立てを察し、また体格

の強弱、学問の程度など、すべて了解したうえ、意気投合し、さらに（ふたりの）両親の鋭敏な判断力で（付き合いが）認められると、婚約を結ぶに至る。それはたやすいものではない。<sup>(68)</sup>

孫は『伝種改良』『胎内教育』を根拠に、当事者同士の愛情に基づく新たな結婚形態を称揚する。これは、単に西洋の慣習に習うことで表層的な近代化を成し遂げるのではなく、性科学書という科学的知識によって支えられた変革である。

すでに見てきた通り、当時の中国で性科学書が広く読まれていた状況の下、これらの書物の説く知識が一夫一妻制の提唱に「科学的」根拠を提供したことが明らかになった。そして、その「科学的」根拠が、近代中国の婚姻制度改革を推し進める一因となったのである。

## 終わりに

本論では、清末中国における性科学書の特徴を紹介したうえで、特に19世紀アメリカで書かれた書物が、近代中国で起こった性愛意識の変容にどのような影響を与えたのかという問題について論じた。清末中国の性科学書に反映された、キリスト教に基づく性＝婚姻＝愛という三位一体の性愛規範、およびそれを支える性科学知識を整理したうえで、その三位一体説が、清末中国のスローガン「強国保種」が求める性の正当性を保証するものであり、双方の愛情に基づく一夫一妻制度の提唱という社会的変容に順応したことを孫宝瑄の日記を手掛かりに検討した。これらの検証を通して確認できたのは、清末時期の中国にすでに西洋の性科学が伝わっており、これに付随してヴィクトリア朝時代の性道徳も輸入されていたことである。また、1920年代に盛んに行われることになる性愛をめぐる論争に現れる観念の一端が、清末の性科学書にすでに現れていることも付言しておきたい。清末に中国に入ってきた西洋の性愛規範が、1920年代の性愛をめぐる論争とどのように連続し、また断絶するのかという問題は今後の課題にしたい。

### 〔注〕

- \* 本論における中国語からの日本語訳は、断わりのない限り引用者による。
- \* 中国語原文および書誌情報における漢字の簡体字・繁体字、日本語文献の旧字体は原則として日本語の新字体に置き換える。
- \* 本文中の引用文における引用者による補いは、1ポイント下げた丸括弧で示す。引用文における句読点は引用者による。なお、現存の原著の頁番号が抜けたり、ずれたりしている場合、注における引用文の頁番号は冒頭を1頁として、そこから順に引用者が私に付した。

- (1) ここで言う性科学書とは、西洋の自然科学に基づきながら書かれる大衆向けの性・生殖に関する書籍を指す。清末時期に流通する性、生殖、育児に関する書籍を張仲民（1978年生）は「生殖医学」書籍と名づけ、日本から翻訳・翻案物が多いそれらの書物を唐権（1969年生）は「造化機論書物」と呼んだ。このほか、「科学的」性知識を伝播する機能を持つことから、それらを「性学書籍」と呼ぶ者もある。本論では、日本の明治時期の造化機論に関する研究を含む以下の文献を参照したうえで、清末における性的啓蒙書を指す語として「性科学書」を用いる。

- ・張仲民『出版与文化政治——晚清的“衛生”書籍研究』上海市社会科学博士文庫第10輯，上海：上海世紀出版集團・上海書店出版社，2009年2月。
- ・唐権『『吾妻鏡』の謎——清朝へ渡った明治の性科学』国際日本文化研究センター編，日文研フォーラム第275回，京都：国際日本文化研究センター，2014年9月。
- ・劉志琴主編／関杰『近代中国社会文化変遷録』第2巻，杭州：浙江人民出版社，1988年3月，265頁。

- (2) 最近の主要な研究文献を以下に列举する（拼音順）。

- ・呂芳上「1920年代中国知識份子有関情愛問題的抉抉与討論」，呂芳上主編『無声之声1——近代中国的婦女与国家（1600-1950）』台北：中央研究院近代史研究所，2003年5月，73-102頁。
- ・彭小妍「五四的「新性道德」——女性情欲論述与建構民族国家」，中央研究院近代史研究所『近代中国婦女史研究』第3期，1995年8月，77-96頁。
- ・彭小妍「性啓蒙与自我的解放——「性博士」張競生与五四的色欲小説」，彭小妍著『超越写真』台北：聯經出版事業公司，1993年11月，117-137頁。
- ・彭小妍『海上説情欲放——從張資平到劉呐欧』台北：中研院文哲所籌備處，2001年12月。
- ・彭小妍「一個旅行的現代病 心的疾病，科学術語与新感觉派」，中央研究院中国文哲研究所『中国文哲研究集刊』第34期，2009年3月，205-248頁。
- ・唐権前掲書。
- ・許慧琦「1920年代的戀愛与新性道德論述——從章錫琛参与的三次論戰談起」，中央研究院近代史研究所『近代中国婦女史研究』第16期，2008年12月，29-93頁。
- ・徐仲佳『性愛問題——1920年代中国小説的現代性闡釋』文化新批評，北京：社会科学文献出版社，2005年7月。
- ・章沛琳「性文化与期刊出版——以「玲瓏」（1931-1937）為例」，中央研究院近代史研究所『近代中国婦女史研究』第25期，2015年6月，118-192頁。
- ・Frank Dikotter, *Sex, Culture and Modernity in China: Medical Science and the Construction of Sexual Identities in the Early Republican Period*, London: Hurst & Company, 1995.

- (3) 性愛をめぐる言葉の翻訳及び概念の受容については、紙幅の関係で別稿に譲りたい。

- (4) いずれも注（1）で前出。

- (5) 以下を参照。

- ・Howard Hsueh-Hao Chiang, *Why Sex Mattered: Science and Visions of Transformation in Modern China*, Ph.D. Diss., Princeton University, 2012.
- ・Tze-Lan Deborah Sang, *The Emerging Lesbian: Female Same-Sex Desire in Modern China*, Chicago: University of Chicago Press, 2003.

- (6) 清末中国における性科学書と明治日本の造化機論ブームの関係については、別稿に譲りたい。
- (7) 張仲民前掲書，184-189 頁。
- (8) 原文＝此書始說精神之愛，中論交合之要，終云妊娠之源。閱者倘玩味而有得焉，其于進種改良之道或不無小補云爾。
- (9) 李伯元『文明小史』上海古籍出版社，1982 年 2 月，108 頁。原文＝《男女交合大改良》，《伝種新問題》兩種，每種印三千部。（中略）居然一月之間，便已銷去大半。
- (10) 孫宝瑄『忘山廬日記』上下，中華文史論叢，中華書局上海編輯所編輯・增刊，上海古籍出版社，1983 年 4 月，上，362 頁。原文＝昨午于雅敘園見黃益齋，持新訳書一冊，曰《男女交合新論》，美人法烏羅著。詢以售此書處，曰在第一樓后理文軒。余是日往購一部。
- (11) 張仲民前掲書，195 頁。
- (12) 葉德輝「新刊素女經・序」，葉德輝編／楊逢彬，何守中整理・校点『双梅景闇叢書』光緒癸卯（1903）年嘉平月長沙葉氏刊影印本，海口：海南國際新聞中心，1998 年 9 月，7-8 頁。原文＝今遠西言衛生學者，皆于飲食男女之故，推究隱微，訊出新書，如生殖器，男女交合新論，婚姻衛生學，無知之夫詫為鴻寶，殊不知中國聖帝神君之胄，此學已講求于四千年以前。訓み下しは，深澤一幸「葉德輝の『双梅景闇叢書』をめぐる」『言語文化研究』第 38 号，大阪大学大学院言語文化研究科，2012 年 3 月，67-91 頁），69 頁に従い，一部を改めた。
- (13) 魯迅／立間祥介訳「朝花夕拾」後記，『魯迅全集』3（野草・朝花夕拾・故事新編），学習研究社，1985 年 11 月，192 頁。原文＝『魯迅全集』第 2 卷（彷徨・野草・朝花夕拾・故事新編），北京：人民文学出版社，1981 年，323 頁：至于人心，有幾点確也似乎正在澆漓起来。自從《男女之秘密》，《男女交合新論》出現後，上海就很有些書名喜歡用“男女”二字冠首。現在是連“以正人心而厚風俗”的《百孝図》上也加上了。初出＝『莽原』半月刊第 2 卷第 15 期，1927 年 8 月 10 日。
- (14) 「青年之墮落」『新民叢報』第 25 号，1903 年 2 月 11 日。原文＝其書中豈無一二關於衛生，關於哲理者，然勸百諷一，其害人心固已不少，然猶曰其中有一二言衛生，言哲理者存也，何物梟獍，乃作此等明目張膽，誨淫誨盜之語。
- (15) 徐維則輯／顧燮光補輯「增版東西學書錄」，王韜・顧燮光他編『近代訳書目』北京：北京図書館出版社，2003 年 10 月，233 頁。原文＝徐維則：世人每作淫書視之，則大謬也。顧燮光：本書無纖毫猥褻之譚。固未可以誨淫之書例之。
- (16) 橋爪貫一は東京府平民で、『男女之義務』（玉山堂：1879 年 3 月），『英国歩操新式』（刊行元不記，1869 年），『經濟濟要録』（刊行元不記，1876 年），『改正華族銘鑑』（刊行元不記，1882 年）ほか，翻訳・編著を含む 31 冊の著書がある。赤川学『明治の「性典」を作った男——謎の医学者・千葉繁を追う』筑摩書房，2014 年 9 月，202 頁。
- (17) 筆者の手元の刊本では，明治 21（1888）年にすでに「四版」（四刷）となっている。唐権によれば，明治 25（1892）年までに「八版」（八刷）を重ねたという。唐権前掲書，34 頁。
- (18) 劉志琴によれば，最初に出版されたのは美法烏羅・日本神田彦太郎著『戒淫養生男女種子交合新論』だという。唐権もそれに同調し，それ以外は海賊版だと主張した。ただ，いずれの標題も 1901 年に現れたため，初版がどれかは明確に断定できない。筆者の調査により，民国期において，本書は『男女快楽衛生法』，『撰生種子奇方男女交合新論』などに改題され，内容に広告を加えた

- り、生殖器の図版を削除したりして、数多くのバリエーションが出回っていたことがわかった。劉志琴等前掲書、265頁。唐権前掲書、34頁。
- (19) 骨相学とは、頭部の形や、その鍵となる部位の発達の度合いを綿密に分析することで、およそ37種類の性格を割り出し、それで個人の性質を評定するものであるという。基本的には人間を攻撃性、高尚さといった先天的な特質が複雑に配合された集合体と看做し、脳の各部分にそれぞれ特定の性質を帰す。現代の生物学決定論の19世紀版と言えるもので、具体的な内容は、シンシア・イーグル・ラセット／上野直子訳『女性を捏造した男たち——ヴィクトリア時代の性差の科学』（工作舎、1994年5月）や、トマス・ラカー／高井宏子・細谷等訳『セックスの発明——性差の観念史と解剖学のアポリア』（工作舎、1998年4月）、278頁などを参照。骨相学は清末中国にも伝わっており、様々な新聞や雑誌で紹介された。また、骨相学者であるファウラーが執筆した本書にも骨相学の知見が見られる。
- (20) April Haynes, “The Trials of Frederick Hollick: Obscentity, Sex Education, and Medical Democracy in the Antebellum United States,” *Journal of the History of Sexuality*, Volume 12, Number 4, October 2003, pp. 543-574.
- (21) 『男女之秘密』は日本において、明治41（1908）年3月に「七版」（七刷）まで出版されていた。一方、中国では、筆者の調べによれば、1922年に「四版」（四刷）、1926年に「六版」（六刷）まで出版されており、現在確認される限りで、1936年まで出版されつづけた。『男女之秘密』原著者：米国医学博士霍立克、編訳者：春夢楼主人、改訂者：中国衛生研究会、総発行所：（上海）衛生研究社、1924年1月。
- (22) 井上次郎「夫婦の愛（上・中・下）」[説話]『女學新誌』第20-22号、1885年4月10日、4月25日、5月10日、229-231、241-242、257-258頁。
- (23) 例えば、『申報』24614号、1942年9月29日の記事にはこのような内容が確認される。現物未見、唐権前掲書、50頁による。
- (24) 上野千鶴子「解説（三）」、小木新造・熊倉功夫・上野千鶴子『風俗 性』日本近代思想大系23、東京：岩波書店、1990年9月、532-533頁。
- (25) 橋爪大三郎『性愛論』東京：岩波書店、1995年2月、158-159頁。
- (26) 日本語訳はS. サイドマン／椎野信雄訳『アメリカ人の愛し方——エロスとロマンス』東京：勁草書房、1995年10月。
- (27) 憂亜子訳『男女交合新論』1頁。原文＝宇宙之間最可宝貴者動物之性命也、然則製造兒女之法豈可輕視乎。男女配合訂為盟書視為典禮、誠慎重之至也。（中略）愛從增進則交媾之念亦從而增進、故婚姻之後交媾之念愈切。製造小兒乃女子終身之事、或以交合為猥褻可恥置諸食念之下是誤之甚者也。生命非生于卑汚者、人之生殖器乃神聖中之神聖。
- (28) 誘民子訳『婚姻指南』「訳者自序」。原文＝婚姻之目的雖非盡在於交媾、然舍交媾不足以完婚姻之目的、交媾之為神聖事業也明矣。夫文明之世知事物之然而不知其所以然、君子所羞也。生殖器為体中第一重要機關、自有人類以來世世營生殖之作用。迄近日猶不知其所以然之理。十九世紀之中葉、斯學始僅得發一縷之曙光亦文明世之一慚色也、何歷之書最能令斯理普及於一切世人之腦、今特訳之以為普通教育之助。
- (29) 66頁。原文＝房事過度、是令人体之營養質欠去、身体異常孱弱、神經亦隨之疲倦、怠若精神病

- (中略) 房事過度之可畏如此。
- (30) 7 頁。原文＝交合之事唯正婚可行，不然者絕無十分快樂。男女所以結婚，為交合也。抗拒良人同寢此女子之罪也，為人妻者，使良人常快快破一家之和睦。
- (31) 130 頁。原文＝人類至結婚期，雖于真淫情未起以前，亦常因特別之德義的相憐，智力的需要，誘使互相憐愛相愛相慕，遂至以肉慾之一道聊達其情。
- (32) 注 (28) の引用文冒頭を参照。
- (33) 28 頁。原文＝鐘情于甲而苟合于乙名曰姦淫。雜亂之交合比徒增淫慾而害男女之性。今夜擁此女明日復擁彼女唯害愛情矣。以妾供枕席之樂較之通姦為善矣。于妾增情愛則于妻減情愛徒增淫慾耳，未見有真樂也。況古今娶妾之家往往敗家釀禍也。
- (34) 7 頁。原文＝夫妻之睦否視乎交合之諧否。凡夫妻不和者，必由交合之不適，若交合相適，縱令百般嫌忌，俱可消融。為人妻妾縱令一無技能，苟于交合之事十分快樂亦可謂完全之妻妾。
- (35) 10 頁。原文＝男女交合為兒女生長性質氣象之根源，豈非人生大事乎，故交合得其道則百事得其正，交合失其道則百事失其正。
- (36) 10 頁。原文＝交合之要務為男子之本分也。能造小兒則為完全之男子，不能造小兒則非男子。女子亦然，不能生子者非女子也。
- (37) 14 頁。原文＝少壯之男女不知生殖器之功用，不知為夫婦之義務，為父母之道理，貿然交媾，真不如禽獸矣。
- (38) 8 頁。原文＝男子之生殖器原為交合而生，猶腦經之為知覺而生，筋骸之為運動而生也。用得其道時曰舜天，不用失其道時曰逆天。
- (39) 30 頁。原文＝男女同事快美製造兒女之要需也。一婦人久患無子，蓋夫婦快之時素未能適合也。某夕春情發動，夫妻共入佳境，遂懷妊也。
- (40) 30 頁。原文＝交媾而男子丟精太早又為無子原因，欲成胚胎須令女子生殖器感動，男子出精早則女子不覺快美而無感動之機矣。
- (41) 130 頁。原文＝夫人類交媾之作用（苟非劣等蠻夷）不只是因官能之刺激而起，其因相憐與智力而起者更多。
- (42) 34 頁。原文＝夫人類之愛戀之心非徒是出於男女之欲。其情實最複雜。（中略）非若禽獸只知一肉交別無他事也。
- (43) 17 頁。原文＝精神之愛無淫慾，淫慾無精神之愛。（中略）精神之愛降則淫慾隨之升。若愛肉体則無所用愛情而取決于淫慾。男女常修養精神之愛則必不生淫慾矣。
- (44) 『男女交合新論』が書かれる 1901 年という時点では，“sex”の翻譯語としての「性」はまだ創出されていなかったため，訳書に概念の多様性が見られる。この点については別稿に譲りたい。
- (45) 17 頁。原文＝愛情与生殖器相感応，所以延伝生命也。（中略）無愛情則陰具不勃起，陰具不勃起則不能交媾，不能交媾則愛情無功用也。可見二者相感応為製造生命所不可欠。近揭其要目于左。第一，愛情司製造生命獎勵生殖器。第二，愛情起則生殖器必感之，生殖器作則愛情必応之。
- (46) 18 頁。原文＝凡製造生命之大要成于愛情与生殖器，而二者之中必有先導，則生殖器功用在后而愛情之誘導在前。
- (47) 19 頁。原文＝愛情伝精神之資，交媾造身体之業，二者不相合決不為延嗣之用。
- (48) 15 頁。原文＝人生之幸福幾隨父母交合而定，父母之交合極快樂者，其兒身強体健，才能俊秀。

人欲求俊秀之兒，交合須極其快樂。非精神之愛不能得之造化，造化之靈妙至矣哉。

- (49) 13 頁。原文＝少婦甚聰慧，有子六歲癡呆甚殊，無生身之父，余駭問其故于老母。老母曰舞女未嘗嫁，與吾女生子吾族子也，現在愛蘭士兵隊中昨秋歸家臨行設宴，吾女亦在席，唱歌舞蹈至深夜，兩人相約共赴林中歡會而生此兒，（中略）嗚呼，因活潑之父母而生如此豚兒豈非因乘醉野合精神錯亂之故乎。
- (50) 12 頁。原文＝一男子性頗淫而其妻春情甚淡，畏交合之苦至設誓曰使妾無勞苦，雖偷香竊玉不責君也。適有一意大利女為鄰家割烹店下婢雖面色淺黑嬌容甚可愛，男子乃戀之百方挑誘而黑女不從。挑誘不成戀慕益。若某夜左思右想春情難遏，乃強迫其妻而交合，妻受孕月滿產一女子，似淺黑婦，是男子之情慾馳系置婦身上故有此遺也。
- (51) 1 頁。原文＝世人一聞生殖器之語，則直目為誨淫。又以男女媾和為猥褻。僧侶以是為五戒之一，世俗以是為萬惡之首。群言淆亂（中略）一國之人民而乏嗣，其國終於亡。
- (52) 總論，3 頁。原文＝生殖器衛生學者，小之則關乎夫妻之愛情，一家之幸福。大之則關乎國家之盛衰，社會之發達，是以生殖器云。男女交接云者，方如日麗干田，水行干地。果何淫褻之有。
- (53) 總論。原文＝男女情慾之感為天性之自然。（中略）為父母者研究此理，必得佳兒。
- (54) 363 頁。原文＝昨夕觀《男女交合新論》，美人法烏羅著。論製造子女之法，極奇。云：凡交媾結胎時，其父母偶懷一不善之念，則所生必兇惡之子。醉后媾合者，生子女為酒狂。故欲子女之聰明醇善者，必其父母之腦思心術，有過於人而后可，屢驗而不爽矣。
- (55) 631-632 頁。原文＝惟《交合新論》中所謂，當媾和時，善良之父，一念之私，遂生惡子。兇惡之父，一念慈祥，遂生善兒。
- (56) 384 頁。原文＝購得東文書數種，曰《普通妊娠法》，渡邊光次著。《男子造化新論》，武藤忠夫著。《生殖器》，美國仏栗智國著。それぞれの書物の書誌情報は未詳。
- (57) 611 頁。原文＝一日，晴。觀《伝種改良問答》，日本森田峻太郎著。女子所以有月經者，因泡蛋長足時，其內必回觸郁積，致子宮積雪，內外口俱供腫，腫極而微絲管破裂，則經水行矣。此余所未聞，記之。又云，男女生殖器，其形狀雖異，其構造殆同。取男陰翻轉向內，即成女陰明之形，取女陰翻轉向外，即成男陰之形。
- (58) 「貴族聯姻」『女學報』第 5 期，1898 年 8 月 27 日。原文＝中國婚姻一事，最為鄭重，必待父母之命，媒妁之言。禮制固屬謹嚴，然因此而貽害亦正無窮。鳳鴨錯配，抱恨終身，伉儷情乖，動多反目。西國則非如此，男女年至二十一歲，凡事皆可自主。父母之權，即不能抑制。是以男女伉儷，無煩月老，如或兩情契合，遂爾永結同心。
- (59) 「婚姻自由論」『清議報』第 76 冊，1901 年 4 月 19 日。原文＝近觀之歐美諸國，男女自忖，陰陽和諧，內無怨女，外無曠夫，群治之隆，蒸蒸日上。如教堂成婚，牧師為証，一夫一婦，禁止立妾，無出妻之義，無淫奔之詩，上不怨及天地，內無憾于父母。
- (60) 「論婚姻自由的關係」『女子世界』第 9 期，1904 年 9 月 10 日。原文＝我們中國的小兒女，是向來不能參與婚姻權柄的，殊不曉得婚姻為兒女第一切膚事情，與父母無乾，更與媒妁無涉。所以西洋各國女子結婚，必定是平日至親極密的良友，或在学校同學，或在公園同遊，或在茶會同跳舞，還要常常高談密語，那學問的深淺，志趣的高卑，彼此考究得徹底瞭然，這才自思其可以永遠和好的，就表明情節，訂為配偶。這不是中國人所未常夢見的麼？咳！西洋兒女是人，中國兒女也是人，何嘗天生註定是任人擺佈的。

- (61) 日本藤根常吉著／無錫丁福同訳『婚姻進化新論』1-3 頁。原文＝于人者婚姻之種類実多，有一男一女之婚姻，謂之一夫一妻，有一男数女之婚姻，謂之多妻，有数男一女之婚姻，謂之多夫，又有特異于此数者之外，為数男数女之婚姻。諸社会之学者与人類之学者，以為太初之世，牝牡乍還，所謂乱淫是也。次之變而為多妻，又變而為多夫，終進化于一夫一妻。(中略)要之一夫一妻為人間最普通婚姻之制，人間之多数既從太古之制而尊奉之多妻之制度，雖多見之于人民，而通例漸變為一夫一妻之傾向。(中略)一夫一妻之制為然之法。(中略)男子不安於一妻，是為踴背天理之人。
- (62) 新智者編集局編纂『男女衛生新論 一名延寿得子法』53 頁。原文＝夫妻相愛之程度，關乎妊娠者甚大。故將婚之際，須觀其意氣相投否，容貌体格相等否，學術資產已足成立否。而尤要者，其二人之愛情果堅完与否是也。中国結婚之法，惟親命之所在，而其親又為利之所在。子女之當意与否，非所問也。
- (63) 同書，55 頁。原文＝近西洋諸国自有結婚盛行。蓋自由結婚者，乃聽男女之自行摺偶，恣相訂約，而卜日以舉行結婚式是也。父母不得梗其議，戚友不得涉其謀，而惟視兩情之契合。
- (64) 日本女医師松本安子著／誘民子訳『男女婚姻衛生学 一名少年男女須知』40 頁。原文＝婚姻之起源雖云在保全種族，然其始甚輕忽，至人類益進步乃益繁重，又各人于生存上，以男女之特長互相裨補實為最要。婚姻之制世上雖有種種，然一夫一妻之制實為自然最正。
- (65) 同書，46 頁。原文＝彼將婚姻約分為四類。心情体格共相適合之婚姻，此是最和王理想值婚姻。
- (66) 孫宝瑄『忘山廬日記』612 頁。原文＝世界文明之極則，男女自摺配偶，以學問為媒妁，并以學問為防限。何也？無論男女，苟有學問，必不与無學問之人忽然相愛也。
- (67) 同書，598 頁。原文＝夜，觀劇，忽厭倦，遂散步至第一樓品茶。買書二種，曰《吾妻鏡》，曰《男女交合無上之快樂》。《吾妻鏡》，通州楊凌霄著。凌霄与余旧相識也，其論人生三樂，与余不謀而合。又謂，凡欧洲自古大人物，強半野合而生。蓋野合者，必兩情相遂，故其種性精良，造成之人往往不凡。我国男女禁自摺配偶，其交合皆用勉強，故種性不精良，而人才罕觀。国之不振，非一原因也。《男女交合無上之快樂》，日本人著，与《交合新論》略同。其中有雲，男子精蟲，為山中之金銀，女子精卵，為海底之珠玉。皆至可寶者。頗有悟境。
- (68) 同書，612 頁。原文＝二日，觀《伝種改良》終卷。(中略)夜複觀《胎内教育》，日本伊東琴次郎著。忘山居士曰：夫婦配合，宜由自摺，欧人之風也。然与苟合有別，何也？蓋当未結為夫婦之先，彼此先為朋友，必待二三年之久，互相察知性情之如何，品行之如何，以及身体之強弱，學問之優劣，無不體驗周備，然後兩情認許，再以父母造成之敏眼認可之，方能丁萌結縭，至不易也。『胎内教育』は通俗教育全書第 44 編として，博文館から明治 25 (1892) 年 10 月刊。

〔謝辞〕 本論を作成するにあたり，上海復旦大学の張仲民先生よりご協力とご鞭撻を賜った。この場をお借りして感謝の意を申し上げる。